

## 狂言学習を通して成長しています（6年生）

山口耕道先生のご指導を受けながら、6年生の子どもたちは、狂言発表会に向けて練習に励んでいます。山口先生が来校されないときは、多目的室と6年生の教室に分かれて狂言の練習をしています。（総合的な学習の時間）時々、下の学年の子が、6年生がどんな練習をしているのかなと、休み時間に廊下から教室の中をのぞいています。6年生の頑張っている姿を目に焼き付けていることと思います。



友だちの演技をじっと見つめる視線（態度）からも頑張っている気持ちが伝わってきます。



「附子」という得体の知れないもの（怖い物）に近づいている様子が伝わってきます。



得体の知れない大の毒である「附子」を食べた太郎冠者を次郎冠者が心配している場面です。



二人して、「黒うどんみりとしてうまそうな『附子』」を食べている場面です。

「附子」をみな食べてしまった申し訳に、天目茶碗を二人で打ち割る場面です。太郎冠者と次郎冠者は、一緒に天目茶碗を打ち割ろうとしているところですが、心のどこかで「裏切るなよ」と思いながら作業をしているところを表現しています。



最後まで真剣に練習している姿や一緒に考えながら（練習に自分たちの思いを込めながら）参加している姿に成長を感じます。





山口先生から、太郎冠者・次郎冠者の泣き方(姿勢や手の動き、指先の使い方)がとても上手だとほめていただいています。

## 1月24日(月) 山口先生の助言より



みなさんは、セリフを覚えています。その段階に留まってはいけない。セリフを覚えた後、どうするかが大事です。

演じる際に、周りの人の思いを受けて、自分はどう表現すればよいのかを考えながら演じることが大事です。観客に積極的に思いを伝えましょう。そして、みんなで創っていきましょう。



みなさん、演じきった分、何か返ってきます。演じきった分、観客から同じ分量で何か返ってきます。

観客に何も発しなかったら、何も返ってきません。

自分の演技が、どうだったかは、観ている人に『今の演技はどうだった？』と聞いてみましょう。

舞台上に立つと、演じる人の目の動きや歩き方、手の動かし方で、その人の心の動きが見えてしまいます。言い換えれば、観客はそういう所まで見透かししてしまいます。

舞台上で、演じている人が孤立しないようにするには、観客を引き込んでいくしかありません。

後見は、舞台上上がった動かないようにする。動くと、観客の視線をあびる。一挙手一投足を意識するようにしましょう。

狂言では、無いものを想像するおもしろさがあります。

例えば、『附子』はどんな物かな？「黒うどんみりとしたもの」とは、どんな味がするのかな？甘い？どんな甘さかな？コクのある甘さかな？

そうすると、『附子』を食べるときの扇子の持ち方はどう持つかなあ？と、扇子の持ち方に違いが出てきます。

『附子』を運ぶときの運び方に違いができてきます。4~5kgの『附子』だとどんな運び方をするか？

と考えながら演じることが狂言のおもしろさになります。



狂言の中での『泣く』とは、「こぼれる涙を手で受ける(喜劇の)イメージ」で、能の中での『泣く』とは、「あふれそうな涙を抑えるイメージ」です。

だから、狂言では手のひらで涙を受けるようにして泣きます。



6年生の猿唄がとても上手です。猿唄は、8拍子のリズムにのって語るようにうたいます。息を吸ったら一度止め、ためてから発声します。そうするとみんなの声が揃います。